湖月抄

螢

8?3
M8K5

33

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

野分 并歌 細 巻ノ名以詞号之 河 此巻野分を以て始
段論しもろ〻之詞に八撥一野分例乃年よりもおどろ〻く
しく又おもしろくさかりしきのまた花よりそわかさりつれ 細 源
氏卅六歳の八月乃るゝ之望并也 五葉 の一段に見えて〻八
伐源氏卅六歳なり

中宮のおまへ 細 秋好む
師 六条院中宮の御方
なり
うゑわたしは 細 皮なるより
あかれと見れは八ちし
うへところさ八朱雀之 蟋蟀 花内

秋しらやさて 河 催しそ
く君がためゆふ花をれは
おとえてや霧もかく
らん
春の山もわすられて
盃 秋の野に對して以
見胡蝶ノ春の一段を黄
じられじくうふらく
春秋のあらそひは 箋
細 万葉のまも見あり万葉
第一 近江大津宮御宇天
皇詔内大臣藤原朝臣
大織冠 競憐春山萬花之
艶秋山千葉之彩時 額

中宮のおまへに秋の花をうへさせ給へる
ことつねのとしよりも見所おほく色
くさをつくしてよしあるくろきあかきのま
がきをゆひまぜつゝおなじき花の
えだざしすがた朝夕露のひかりよ
のつねならず玉かとかゝやきて作り 細 秋の波を
わたせるのべの色を見るにはた春
の山もわすられて涼しう面白く
心もあくがるゝやうなり春秋の
あらそひに昔より秋に心よする人
はかずまさりけるをなだゝる春の
おまへの花ぞのに心よせし人
又ひきかへしうつろふけしき

田王以歌判之歟 へ冬秘抄 云云これハ不喧
あまたにてもよしとけ草かうてりてもさらしとも秋山の木の葉をとりて
とハ云てぞ今のをきさとハとそてぞ見ずそこう花そこうへきこじ秋山ゝれバ
河 樹下集ニ云へるてこそいられ被進とよ御しとられ秋ハまされり墨之
云つらじ花のひらくまゝ見ぞらの秋の衣ハ秋ぞまされる 後徳大寺和三七二 中将
云秋の寿合のまさる秋宜より へ花もころ紅葉もころ虫の音もよろしく秋
く秋ハまさられり
わきのみぞしるわさまれ
しかれど八月ハ秘密陽
細 光陽の流忌月されハ盛
らし秋節ある師首ハ
まやうの流忌月なとまハ
流経ハある□ちまさる也
花のうらかりといふうるよ
やうらんとも一つ喉葉に
とく
ゆくら例の年とらくも
河延喜十三八一自申刻大
風折樹破屋 天慶五八十一
大風暴雨 如延喜十三八朔
暴風ノワキ 野分日 花 杜詩八月秋
高風怒號スト 云云 細 八月ハ必
大風の吹く事三度ハ吹よ
りとりける花との奇特く

久しかれ人ゝ気色世のまよ海かさらう 細 時移花の漆…
細 中宗以花方よ里傍久まかく
られとならんじつきてよふるね
わきびみぞしとおもしかれど八月ハ秘密
陽の流忌月なれバなりしなく必ずつゝあけ
らるまこの花乃色をまろ乃花どもをと
ならんぜるよ昨かる例のちらりも必ずるまる
くしく宮の色めかりて、わさいつ花ども
のまかりてといふとさしもおひもぬ人まよ
わるもりるみとおさそろうしともあして事よ

山かよ紅葉の事かり胡蝶よ其流ゝあのとぞまよの遊をこわつとぞ
とかきこ事かのつきとけ地らりて秋の花皆をもろくちりれかれ
ちくちよへとらへらうらく 花紫日
ひとさし揺り八ちず ぬ 細
へぐるわりよ秘ねのうぞ
まりてとく
家の玉乃を 光古躬恒長
家君のをとらけてこそ
しおくれてられて君こそり
師家ならハ玉ねさし家の
らされるかごとくかれ之
家ハどくりの袖ハ 細 大定
よかわよどくりの袖もや
表曝花と風よまらせじ
秋の露かし 細 かろう猶之
表の花をとわるとくとり
あまちと面白し
のうと 古 秘まるこさ起そ
うとろかくいろしと花
ぞうの梅の花表のる
の風乃うしろめさきよ
表の名れ風のうしろめさ
ことふ長帝のか経
しわうの不恕らしまく

細 中宗の流ゝよ八月と身よ入て思ひまめぐさし盃 素花をかぞ
らの露の玉乃緒をぶろうしおよ
まぐれも志ぬべく必ずかりぬよ
里の袖しわきの気めりしもこそ
守りられもおくよ物をみてぞ吹
まもろうていとしもしつ帝もれバ
しるじまりぬるよう出ろう
と花の上と覚ゆ歎くこれその跡
と我ヘ栽つくろそを結ろかわりも
吹出からりしかしのて荻そ
ちえてる風の名しさかりおれ

まちえたる風のけしきなり (河)宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風をまつごと
君をこそまて (細)引哥風を待し君をこそまてとて風を待といへどもおも
ふ人のかたに吹かとよろこびけれどもいのちもぬるばかりなるをしらせんかとし
哥なり。よろこびがほなるまじく
草花のをれかへるを見
るまじうなり

こさうしのうへより
小障子上之 (眺)常に屏なる
やうなる障子のすみとよ
りみつのうへを透間あり
あらはなる也 是よりの
ぞくなどもえ見ゆべし
ら(ハ)上の方なるべし
細 こゝ上之御事にあらん

とまるまじうふきちらすをすこしはし
ちかうて見給。おとゞは姫君の御かたに
おはしますほどに、中将の君まいり給ひて。
ひんがしのわたどのゝこさうじのうへより。つま
どのあきたるひまを。なに心もなく見いれ
たまへるに。女房あまた見ゆれば。たちとまり
て音もせで見る。御屏風もかぜのいたく
吹ければ。おしたゝみよせたるに。見とほ
しあらはなるひさしのおましにゐ給へる
人。ものにまぎるべくもあらず。けだかく

春のあけぼのゝかすみのまより
おもしろきかばざくら 樺桜ハ桜の
(細)朱樺 和名 浅みどり
野辺の霞ハつゝめども
こぼれて匂ふ花桜かな
細 かばハ桜とハ別也 紅梅
の花のやうなる也 古今ニも
つゝじハ桜のやうなる
孟 紫の所をたとへて
いふ
みすの吹あげらるゝを
ふくとまうして
孟 鎮帷屏とて几下
おさへぬものを
物なり

めうつるべくもあらず
孟 紫上より外の人々に
目も入もあらぬ楊貴妃如

きよらに。さとにほふ心ちして。春のあけ
ぼのゝかすみのまより。おもしろきか
ばざくらのさきみだれたるを見る心ちす。
あぢきなく見たてまつるわがかほにもうつりく
るやうに。あいぎやうはにほひちりて。また
なくめづらしき人の御さまなり。みすの吹あ
げらるゝを。人々おさへて。いかにしたるにか
あらん。うちわらひ給へる。いといみじく見ゆ。
花どもを心ぐるしがりて。えみすてゝいり
たまはず。御まへなる人々も。さまざまに
ものきよげなるすがたどもは見わたさる
れど。めうつるべくもあらず。おとゞのいと

の外ハ梨泥土とえんにお
ぼしさく
いまりうゝさはんまで一
細 ひろ人の上よハお□
じきこし源の羽り涼さ
はんそそ好かりけれも
ミせ給つぶやうし夕
顔のさ入へまつく
もしらし来らりやと一
立案 今ノ夕顔九紫花とを
てん勅をめぐまししく八
源の名を出おくさ給
かく
とのこともわそんと
西りやうの時ハとのこ
とり。来ゝダべさふちえ
お源の名つひく夕顔
をむまきれよみえ人
るる 光をおつべし

のいとけどほくうとましきよりてそのかへる
くさくさ人ハさでわはえ好りよかりぞき流
紫の上 おそ梅を。つくりふりき流んかくかし 源の名を夕顔の思ふ
かうしとりやと好かりとなりうれりと好も
やまげらひゆそろしくそでしらさうかそ。 夕顔の主のうちへ
細 源氏御時の姫君のこさうりて
かの流りさうりぶしらの流くさうじひさ
あびそまくらりあさいとうしそあそしうく 細 源の御 か周章
しき風きありときうしゆろしてしよ。を
のことあらんとあしハふもしそあ 夕顔之
まてゆのし給とえりてられハ。ゆゆのし 細 源氏弟上への
のまうき 源氏も
てゆしじも源し出るそぞきそでまくり
夕顔の源を其の名を
給わやとゆかしもてさつくさつのしたか

さうあのわりよされへ
夕顔の主ましまひ
しわく主へ福まれ
ともしおかもし師和
まかのさき殿の小陰よ
のよりそられまやさを
その外几帳を風の吹ち
きうさすく 細 是今ま
今まのやうよ
そまつ福よしそ夕顔の
こハつくりまつく 盃 名の
今姫そまうりまさうま
し給く
これよおしかうりうつん
箋 源詞上詞をそうりし
おうしてよそのことをもわ
ふかんとおゆつまとそ
あれ此詞まうおそざれべ

まめやそていそぎされうらのきかりける
紫上もし 女をわびしのひあゝぬこしなきさ流く
まどひも寄りのところまやもしむびなかりお
かびれど。この花き殿の。東おりうしもとふ
ときそおちてしそそう前のおしそそまされ
へゆもろきくてしうらのふさね。今まつるやう
盃 源詞 よぎらこはつくりてすよくのきるまあ
ゆくむあくれハされぐよおしへたうつく
東の主さへのつけとし んとそ。あつまじのおきさうりけうりとい
箋 夕顔の名 まぞさし。があ給としばりうしの家あ
うりつりと風てそけりいと源をあさ
これかうさせ其おりと
あげつべき物あるうれ。さどうりのれんと

まくのうちへ
ちはやぶる神の御すがたをとは 孟 夕霧が心に御かげを見とめて風ゆへ
みなく師 決ㇾ書の手をさはりさ給 細 河海の抄に嵐とは只風の力を吹あぐる様にて可見
風をそゝよ
さやぎそよぎて吹そふなり さればそよとも吹かれぬなりける事
をなさとよ只今そなたは秘よ風のいろに吹あげらるゝとし 河史記項
羽本記ニ云於ㇾ是大風従ㇾ西北ㇾ起テ折ㇾ木ヲ発ㇾ屋揚ㇾ砂石ヲ窈冥晝晦 師 當流此段雖ㇾ不ㇾ用
記ㇾ之ヲ
きたりの御心ととを 孟 野分にまつさえ物をみたらぬ事と夕霧のへ
しもとのまへにさも吹給
まほ 養 寛平御記ニ云
八月丙子ㇾ陰ㇾ昨日暮ㇾ
今日雨不ㇾ霽ㇾ昨日申ㇾ
一刻ニ大風自ㇾ艮角ㇾ起ㇾ寅
二刻ニ息云と 細 南八も閉
ちまく此の上のさわ
のどかなまそて暮かなる
こゝまでそより 孟 良
の方られど南へさのそ
ゆうぬくはれ前と八此方へ

をとさはげしてめぐらしくあはれさめとよみ
つらされとものがたりまつりていとあはれ 源の家来の人々に 其相と秘つよく
すぐ吹めぐる風よ八倍りぞしくのうき 此風は吹べしと也
まりみさ侍れば此のおまへの心のどけさを也
むすばの事ぐさるそ思づり厳ならば 花散里の事をいふ良町也
おやうげよきんとそこくしなさるへ 風をよそく聞てまるなるゝ
のるそう中ね八いづこより抛さつぞ三条 細 源の詞也 孟 夕の心也

細 野分の御方にさらぬひしとなく
のあよ侍りつるを風いとく吹ぬべし
のやつれば此ほうつゝらまよるん急りて侍つ 六条院のなる
う 孟 三条の大宮のかりを夕のすまく
こゝふはましてむ隙なくかどの者ども
今そえりてわくさこのやうよども給めれ おさまる 細 抱どらをしきさへ
ばらくろがらしさうよ出までそ侍るへとぞかすへ 彼夕の三条の宮へまゐらんと暇申すを
ずよそやまうでまねおいりそいとてきまさ 細 源の詞也
わかうるかくし世よわかおじきてしあれど 老ては皆さよあるとなし
げよさのこゝそあれあずど気んゝ中のうへ 細 三条の宮への源の御云傳也
うくさはうげよなへめつとこのあそんなにてる 源の御返事をさしてのる
へずとさうまんへゆづりてあじれさうそこ哭 夕霧を申してのまえ
えお給ふらうそぞりりもそすりかどそれど 風のそげしさを歎く
孟 夕霧の心正しき人也
うつくし抛しまふむまで三条のそへと

老をそへさそてわらふうる
あるり 御 わらきみ
かやうよと夕霧のや
ちるおわりくの給
ふ
まくらをがくし 孟 梅 六条
院くに三条の宮の方を
がりく見より氣よそ
ゆとさまそで夕霧かるを
と思ふに詑よりなき

三条のおとゝ六条院と　細　夕霧のつゝしみさるゝ九条殿の遺誡にいはく、有病患者必可謁於親、若有故障者早以消息可問夜来之寧否、大風疾雨雷鳴地震水火之変非常之時早訪親次参朝 云々　抄 礼記文王世子云文王之為世子朝於王季日三 云々 下略　夕霧ハ儒学を志の人なれハかやうの事もよくし給ふ
之孟 致さるゝぬまでも日く に父を可見事也

うちの御物いみなどに　孟 物忌の間ハ参籠
さる人ハ私をとりつゝしみ給
へども此時ハさらぬ事なるへ
らざるべく

あはれに見え給ふ　孟 大宮の
夕霧を待えさせ給ふ　師 夕霧
六条院よりも三条の宮へ
参りし事を給ひまゐ
らせし

六条院とはまいりてみたてまつれ給はぬ日なし
しうちの御物いみなどにえさらずこもり
給ふべき日よりほかはいそがしき公事節会
などのいとまいるべくことしげきにあはせても
まづこの院にまいり宮よりぞ出給ひければ
ましてけふかゝる空のけしきにより
風のさきにあくがれありき
給ふもあはれに見え給ふ宮いとうれしく
たのもしとまちうけ給ひてそこらおいぬ

ゆらくのゑゝ　河 殿瓦 京ハカワラ
細 おもふるにも落たる風瓦碧
尾雨推垣也　師 棟瓦さ
のかわらさへのこるまじく
ハのまふ　細 ゝ
つゝハられしくおもはれど
かゝるもいふ所あさき
殿の内いとゆゝしく
より
そこらところせかりし
細 推門にもし人へそあれ
しも今ハ此人の
ゆかれけるとそ　師 此物語
ハ盛者必衰のことわりを
のせ
にかゝの御門よりいて
夕霧ひとりを

るよはひにまだかくさはがしきのわきに
こそあはざりつれとたゞわなゝきにわなゝき
給ふおほきなる木のえだなどのをるゝ
おともいとうたてありとのゝかはらさへ
のこるまじくふきちらすにかくてものし
給へることとわなゝく〳〵ものたまふ
そこらところせかりし御いきほひの
しづまりてこの君にうちたのみ給へる
つねなき世なりいまもおほかたのおぼえの
うすらぎ給ふことこそなけれ内のおとゞの
御けはひはなかなかうとくぞありける中将
よもすがらあらき風のおとにもすゞろに
ものあはれなり

みそひつう
今もちかうのゆかしの 孟 今もちかうなりけるとしくおそふに今そてもゆかしの
こゝさ御身にはおかれねど猶孫殿のゆかしく源をれむこに指まつる所のやうにまほしき
まかしまうしくくさ 細 身をそおもしく 御内府ハくつて夕霧しかしかしく

こと事にとひられど
異事に心を移れど猶
おやふくよとおもく

升くの御心がくハを
細 花数里ともとりども人
にも源くうを祥勝き
れんしと文ゆもしとおひ
まゝし
人からのいとまめやかなれ
細 夕霧ハ室家の人なり
れ まだにけなきさまなる
まじきまつと思ひます
え 孟 夕霧の心をわが
物よといふぞは猶る
る人を引しくおもなく
あろくさしてゐる
箋 寛平御記ニ 寅ニ魁ニ
息とりても気きえ
えそくう

かけてこひしと思ふ人の御ことはさしを
かれて ありつる御おもかげのわすられぬを（細 雲井の雁の事也）
こはいかにおぼゆる心ぞ。あるまじき思（孟 紫の上をいへり）
ひもこそそへ。いとおそろしき事（これもかれもをいふ也）
とみづから思ひまぎらはし ことゞに
思ひうつれど なほふとおぼえつゝ。こし（紫の上の事を心にかけたる也）
かたゆくさきありがたくも物し給ひけ（細 かくいひたる也）
るかな。かゝる御なからひに などてひんが（紫上の御事を感之と也）
しの御方 さるもののかずにてたちなら（孟 花ちるさと也）
びたまひつらん。たとしへなかり（たとへんかたなき也）
けりや。あないとおしとおぼしらる（花散里を笑止とおもふ也）

おとゞの御心ばへをありがたしと思ひしり（源氏と夕のくも）
給ふ。人がらのいとまめやかなればにげ（夕霧の心のさま）
なさを思ひよらねど さやうならん人を（孟 おなじくはとなり）
こそおなじくは見てあかしくらさめ。かぎ（細 かゝる人をとおもふ也）
りあらん命のほども いますこしはかなら（紫の上を）
ずのびなんかしと思ひつゞけらる。あかつきが
たに風すこししめりて むら雨のやうに（細 秦には雨也）
ふりいづ。六条院にははなれたるやどもた（孟 殿の外のうちの也）
ふれたりなど人々申す。風の吹まふほど（孟 殿室ども也）
ひろくそこらたかき心ちする院に人々（夕霧の心也）
おはしますおとゞのあたりにこそしげけ（箋 花散里）
れ。ひんがしのまちなどは人ずくなにお（孟 源氏の御座所よりは人も多かれども）
ぼされつらんと（花ちる里の事也）

又わらんよとひそくれ
ありし
細 窮しのゆるし箋下ハ
雲井ノ雁のまゝよ又望の
上のまゝ此段ちうし

箋 花散
暮らうじて
里之 孟 凝之ならふと
しんくとりじと圖之
師 慇ふかくしれるゝ之
用乃意之

何 會明
やかきられつくんと。やどりはさあそでまちこそ 夕まうの名おてあるへし
のほのとするよまり給ひしの給ひしさ 孟 花散へ夕の答のうち
海あめいとひやくらよふくさいつ。そろしの 細 車の内へ吹いるゝ
ろしさをもごとるよ。おやえくおくられる 孟 是よりうの人く
うしろむく。何ごとぞや。又わがんよとひ
そくれうとも。やりひいづれども。いとみけ 孟 夕のんをわれる
るさしとすらうおるりわぐるめしと。
とき海うらぶるよとく。ぬんげしの流るさ 夫ろう乃
よせん夕のく顔まうぞ見つれハとぢごうして 方にく
おりしろうよ。とうくとさて。すくさめてへめ 花散里に春初の句く
して。下つくろうもくへさうしるとひ 花散里の言の破損とつて
とう見て。ころすくしの軒くよ気りあへれた。 孟 源の言く

みくしす浪よあるれる
かくらん 孫 高桐
源の寝所の比のとくとり
の高桐しいまご此ちの
ごりとるよ中将まい
まもしらでまふ之

夜ひまぶうまらんへそて
昨日まづまうてるど
えども。みるしまご此ろ

まごころうしをまつくらずか。ゆきしまとに
おくれりくらんよそしりてこわくせ
ど。山の末花くもみきるびりしてえぐどうも 細 庭の山之
此かくわれかしまり草也しへさくらみす
いまん。ひるくごりりし。雨くのくそえじとし 枝 皮 立 節
もいづいるぐやうのりれそぞうりうし。因 透 垣 細 草ともの中にもありぬさ
のもうりよさうし此るるよう娘へ河わする
せはのつもごうろくとして庭ハいとると 師 此ふの細てみさし
ごうこうりしらうれるよ。そうこもうとるすく 夕まうの世のまめの人う
洞のおつうどみしのごひりくしてしらう 細 源の御之 孟 源のこくつけの事
あそびさまつれバ中ねのうはづくるさぞ 又まのめく
わる本。夜ハゆふごさわうらんへハとそ此さ給ふ

しらくもそでくの
あかさ
いかしへつまよ　孟 源の詞之
源ト紫トの間ニ贈の歌
とちうハるかをを今
ハ早く迎ふべし

女のいくへはここてねと
孟 紫の返答ハここてね
とも一段よくさ此中ニ夕
のこくさかる

えんくしとれまつく
孟 内へよらいれ格子さん
し 孟 源の手つく之

見。何がしよかならん。ふとく給て思ひをきぐ
やくらひけへひかそ。いかへざまよきつせ
すくれまりかし。おろきのまされよいま
すくひ給ひんよ。うろぐらうんとそ。ど
ぐらりくうくひやのく給けりひども。いとお
うし。女のいくへハここてねどかのぐやう
よこくくしもへられ給くとのしれともむさ
よ。御かくひるさされるすくひかれとこそねまく
つむかんかくくしをされまづひきおけまく
べけらくさくこらくいくさうよ。ぐもらのさそ
まかくひ給。いよそよ人。ぐやハまちくろ
しひ給きや。志かくくぬのこさくしまよつけそしし

（頭注・傍注）夕の格子へ…　細 紫上と地の…　細 源のさいふれのかたへ　紫のえ　河 無表　細 ひまのあきされあいひとく　紫の寝不返おられいく　細 源ノ詞へ　ちくよのりへ　細 夕秀の返答　細 夕秀方の返答之　抄

うらの年たハ　細 まもる
よのまうへ　義 ちらぐくと
ちうく春んにへすまへとき

更るどの旧けう　細 細
うゆうとあろまうらしといふ
こうれり。西ひきこかかりの
春かうとく 孟 内大臣ハ人合
ぐうりの家之見や。常に有り
西之 おか外ぐとか みして
言源ろうきこかうらべし　細 夕ま
こうろのく御出すり 義心
新清さ不あうへく
よう車てる不まそて。云ひづ
りりのかう人とふうや
うくらんすきてず、
細 ちんのみきさへハまれるう
とく大形ハ手紙ろうられどく之

御りうよ地しみへつぐいぐとかびんよて給れ　（人丈の傍ふ…）
としまま人ハ。ふらひまて。いまいくぐくらな　（細 源氏のへ　源の詞之 師宗久しく八如…）
かころぐ。まめやうよつぐまうさく
まこらの北とぐさご御かかしをあすおや
うとまそられ人給しら人がくあやおぐ　（内府之　細 内大臣のうすと源）
ちるやうるよおしきさるまよりておや　（の外のかへ　河 雄註 日本紀…）
あどの口けらども。いくめしさうこさ御さ　（考）
ハしそく人おもらおどろうさんのくかう御
こるよ去うさて。かうさ不もあさき人よあん
御をもれけり。さうハくの心御出てく。いと　（曲）
しらうさこ人の末乃世よあまうまそて。ぶ文　（末世よ不紀合…　細 うろうしらき）
さぐひまくうくさるかしらへとしてうぐきん　（雛）

もろ〳〵へまゐるこゝろなど
中宮へまゐり給ふも風をおそく
御覧ぜられしをとて中
宮へまゐるなるべし

とうりあひ給ひて
花の風の痛たうりあひたる
ありて細風のふのかうり
合うつくし所御覧じ孟風
中へまゐる痛しうるさ
件源の御返しあるべきこ
とはりなし
ひんがしのさいの南おもてとハ
り立て御前のをことを
ありあへハ
義 中宮の対屋なるべし
孟 中宮の御前を夕乃
こゝ之師ふとも見ゆり
あれね夕霧のこゝろは
なし

かゝることハかゝるころなれどのありいとしみじく
ろくしうりつゝうどもよ。中宮よそろく
きこえつかさるべきさふらひつしやしそこ
のけしきくれはうそこゝて給ふりの風の
とハいふかくいとをしうくしつゝみえうら給し
よとこりあひはてゝいとあへがたきよ。中ため
らひ給ふ程よろしんと中将給。中ねおりて。
るまのらうれとよりて。まゐりあふ
おさろしけのこゝちいとめでたくかうし
けすり。ひんがしのさいのたいの南乃そばよ
まうでゝ御前のさまをやつらのへんてうか
しのさまどもりあはげくはのうるすのあま

（傍注）源御返し　細 夕霧　秋好之　細 源の御師 宮ハ消　息の御之　どれ後よまゐらせらるゝ　しそこし　細 夕霧の形之　細 夕霧源の御前也　中宮之　細 宮の御生　御殿の御返之

うちとけたるハ　細 辛き
てハいかゞなどとて人々を
ねと宮の御前ハ御きさき人
まゐる
こゝろおもくぬゆゆれのかと
同 上の御よりのやうく
さしつきそらふとあり。
こゝみのけられとありけれ
書云野分も暴風後朝
重雲未晴陰霧猶暗
とくへよゆられのこゝのごとく
ろうるしゆかねみゆらくり
こゝやうられバさこくうす
ぬゆゆれと云る夕ねよ霧
もゝうてとありうるく
ねさまさけども云 義 南の
此うへをうちとけより
日のかゞやかうへし。されど
こゝろよさしむうるふと
いふり今此中宮ハ南とも
てうれハ日の光をうけるに

らけの猶よこゝちまさりてんぐみすり。
うらんみもとりりてなやかつる
渡殿のこゝろぐらしけうちとはうがあら
人ぐやうすしねあげられのかどいまかく
みすもさくこいハいつれとすくかうしわらはべ
おろさせ給て。むしのこどもに露か
をかはせ給ふなりけり。しをん
なでしこのこきうすきあこめどもよ。をみなへしのかざみ
などやうのときよあひたるさまにて四
五人づゝつれてこゝかしこのくさむ
らによりていろいろのこどもをもてさまよひ
なでしこなどのいとあはれげなる

（傍注）細 中宮の御前也　孟 衣の服る件と八 贈ろ也　中宮ハ御前ハ童女之　旧 底本之　孟 虫屋之師 虫籠之　孟 秋よ虫あかし云あのみゝあり　義 四五人ゴニン　虫籠之　細 風よ吹らるゝれ也

況や那らのあくの花をもて夕顔わかれさまハ一入まさりてあはれなるゝれのとくくるゝ
し。師　養の役男に記之外ハ河海に同し
とどみるへしのうさて　河　女郎花ハ面の黄ニて夕さハ黄にて裏のえさきゝ
此ハかをひ風ハ志をよこもくに白ふ花ももろれわりそ細晁三家御本抄師本也此細
心得さるへし　晁　志をよ
流本　日紫苑こみ　志くよ
或本　紫蘭　志しらう或本侍従
薫衣之遊ニ　義　志とよ
の個ニ旅紫苑といへり此
中宮の泡のしまつる次お
そは毎ハ秋の籬よ白え
ぬ花まてもみとの中の
追風の香よおかうやうる
薫香ふかやうよ宮の袖ふ
違方ふすやとひかれかゝ
よくらき弥冬といつら
白ク旅紫苑を云わしく
ことくくよ秋の花ともと
のか白ひよハあらて色も香
よ志とけうとゝ云るそりさ
れハ右とくよ白ふかんゝう
のらわうと引てそて云
べしとて　師　此侍従と如は
細流

えぞしくもとりてまゐらす　同之
いひしらえんまぞえてけの吹くらとひ風ハ
志うれうまことよ白ふられうわりもイな
志をよこそぐるよ白ふ花のいろもうのうわら　薫らん
もあれどひまつる流れけつひひゝやしいとをや
まめそてさくらけうをとられくさらいそ　夕顔らゝよく
あくまれど思ひやるようらとしるひとく
夕顔のく　おゆるふまつるよ人をけさやうる中ぞろさき
だ阿みはあられど思ふぐらりてれ流
夕のゝ　まいりのかどうどまちくハいまそいつきら
まれさうしあれハ女房なとしもいとけう

夕の名さうるすと侍従せり薫衣香の袖に匂ふく香に白ふわらん　香のとと云字あるへし　諸本不同
一本志しうのうよこと此白ふうかうのかわうも　河荒玉年月　河　侍従ハ薫衣香の一方なり
うわりハ麝香の中く花うゝのかわりも然て侍従の焼物といへり中宮の流ふうる香に
られくさき物の香をとりてろやしうるゝ河海よ麝香香といへるよ旅孟ニ上流白ふ
ときよ表紙よ料紙のまうらゝてハ本を物とそえて立示く
られふひまへ前あらひや　河海　細くとひへ裥のくさをけしだとるとて云べくもし秋好
の中白ひいしあけやくし　義　河後蓄荷葉秋の花も宮の袖にられ多そてうゝ香よ白ひ
ゆうかやくとゆれゆらく細　晁の香晁之細　うかうひのう心と地して八袖うつくさうゞ中宮の
ゆふかやひも立そひさうくく　ざきりの此白ひろちうゝるゝくし　師此侍従そも花さこと
仰ゆうしや
せゝろさゝかよハあらてそ　細　夕顔の此いやりかにそちらぐらく　師　この所うらうべきよ爾ども然
へし。紙よ所つぶしとやうよハあなる之詞あれらゝさまよく
此ならの作ど　細　入内のうしめまどハ夕顔ハ童形（トウギヤウ）まそし女中みも内あやへ執ちらふ絡わぶう
之孟中宮の入内の時ハ夕顔ハ童形そすうしくし猛くよまられ女なうし女房なくへけうとくつせ給之
此をうきこけいをさせ
細　源の此しるそこ師　義
宮中宮へ約しもと居もそう
とらうり
られくさいへど　晁　夕顔の
ちよ南の中そてよ思ひをと
しあひしにさいハいそさ
くきてく　細　紫上へさてひ
もみてつしくさひしまよ
そも又とられて上臈記

とくいふうくもこれさうそこけいをさせるそて　細　内縁
細　云しも夕顔しきりつ人をそし　寒ねの香るいうゝしのけうひとそれへらさこ
こしるえ　師　源の消息に對して私のとふ　うじとも香のひやうようしひ給るられく
ささいへどけしうくすこしうけゝうしひ給　紫上卷之
なとうふ内に海く物とひいぞてうとられとの

守り孟　秋好の御前のしつらひのひろきそのさまを
え御くやしうひいそぐらう　花　紫の雲井雁の事を　箋　雲井雁　紫上なとにも見えぬ
なるべし　是を紫の上のうへと一偏にこゝろへき事なし　ともなき祠よりかゝらんこゝろ

あらき風ともかをらせまつくやし　細　御前のさまに源氏
くやし
御消息を給ひしとて　箋
よりかへでらの袖とり人
る給ふもるべし　孟中宮
の御文　紫源の中宮へとき
らせ給ふてふかをらせまつくや
と思へども、さしもなき
ところのふかくかるれど
今らん夕霧を御使にて
郎君やられけれはまつ
かくさえみ給しのさつく
ならぬなうかなりと
男孫　中宮の御前よりも此
左伝よ鏡しもわかるに此

紫のきのふ
あけくらしたまへ
ゆく中将こそしほたれかちてしふへこ
七 端近思ひて
もそぐくさまし花どもの。行末とも知らぬ
風よわきをしなさし
やうやくあれつるかしこのいそぐ中
夕霧
のあり
ねむごろしなおそ。御うつりて、給ふあら
秋好の思ひすと源へ之
き風ともかをらせまつくやし。わりくし
くらぞそくまかしくはかとつまゐらんなぐ
細 呉今の御文を給ふこと
細 源の給ひ
さえ給ぬらんとゆかしまつれいおやしく
孟 中宮よりみな給ひけること
わえうよおく千するらめるん。なともら八押お
箋 又の中女房かくり
そてそて
そろゑく思わしめべりつる夜のさ夜な
男ハけよとつりるりともかいつくんそ。

源の中宮へて
やかくまうり給ひすらしるかなんとて。
源の御衣裳よしうらんとそこ
こすかさおけていう給よこゝ御本
細 紫上の御や
丁ひきそてもりよこちは御袖く
とどーめぐくにかけむすく
ちいなよこそおかくめしまりふよむねつふ
夕霧らく
胸くるしき心地
くともならうらすりもうそあれだ。
発成之 孟同
金源又えらりて
わりぎ海よこやつまれ。厳れかじこゝ
源氏のこ
まてものびて中将の翔げのとぐこはさてよ
細 源紫上へ口をかく　孟　夕霧を紫の上のこ
げるすり私さていまはさびいるべき雅を。
孟 年も御らね尤とく
かびくのちらはらと源の御がたらこ
りくるすうしびとゝゆらもうとろのや
こゝやおりんとそ。わかれりわいふりかと
源のこ
異
秋好の中宮の御方と源の宮の
こくらしとこゝ給へかり。いてつくんげさ
うしまて給はしてしそまりつわんふつり

まふてはおろことと源紫上
やもちえとく

うえのそこや
おへんの歌乃らはくし。

何ぞうらのゆへくしさまも
義可のうすくまい見る
ごしくのべいきれともこ
へおつゝで行くよりきれん
とらう
中ねるすずめいうて
お夕顔の宿の上の袖口と
さそいさくるようくれい
かさ歯まいるりてこその
まくるよりくるまくろう
ほくじくとるがめいうて
居ちらく作て源の義
かへおんとえくさまうとも
えるしぬく
立くり女君よ　孟源の心
よ夕の御むことがめぐれ
て立帰りて紫上に對し
て同語之　おしい夕顔の孫
御をも不審よこえり語
ふて立帰りて紫上へ見
えるひおぼりし弱きふ
るり
わる此わるこうしよりし
河 彼々、い愚案　おぼよの

うしてあれ。何ぞうらおしへてうら。ゆへく
しさしみて侍らぬ人の形くゆりしく。
ころづつひたぶるれ給ぞりし。いとほしと
りは女君さ物りしがりしるさんてそ給へ
もうやしく出給よ。中将はすずめかりて、（夕顔のこと）
とうよも似ごろくまでしさ日ごとかく（孟夕々の宿…之）
ねまへるをとときへの形かまはいうごこ（源のさとき同…之）
給ませんへうらうり。女君よこの上のおせ此（紫上まく之　源氏之）
まぎれよ。中将はこむすりやしうんおと（細 紫上之御秘）
乃あそるらしよりとのすへだゆりしく（紫上…之）
うちありめて、いうてりさはおんなさ（まるきある之）
どのしくゆけ。ひとのをととせぶりし

こともおうらんとあつふ
ゆもてそと源の作りまひつ
をまれべおつ八月うらん
をそつまでの時くまうろ
うらいへそうもくさぶあぢ
とあり源の御としりて
まく出ひ立ひよりまみれ
がみとふひろうまおゆ

とりとちさ之語　まいるう
紛りかへりのこまぞも中違
ゆをまたとみそくやり

ねびとぞ宵し給。此おやしとひらびらそ（細 源の心之 孟夕顔の御仲と源の不審之）
ましらのね。ここのちらまうる給あれば、（發 中ゑの片方そての事之）
中ねもさどのとどらばんぐのちうひもと（夕顔の作と見ゆ）
かよりて。枕まじそひさうち侍れど、之（細 雲）
やしのそらぐくるすげりしくて、皇いより（御庵此寮之の事之）
とえめりてねしまくり。うちりや（源の心え方へゆらくと之）
てゆまくをりておりしのれりさとこのむり
しまへぞらぐくあさけりしうろうへみど（此と上の方のこの事之）
ここしぞらうれてうえどづつくどとぞ
のあらまぢつてありしくぶらうそへあぞ
此おりしさあこめすずしらとけてゆとぐ（發 字のあるまぢへし一說）
めらうまきくぶへ語。つるんどうあうかれの（とりそ之）

こうちきひきおとして
花 衣架よりけしからぬやうにとり
かけてきる歟 弄孟曰
細 御かうしの上に礼ありさる歟
弄曰
けちめ見せたる おそしける
かゝる時しも今の源のおかた
ぐ(く)は別のけぢめ見せ
たる也
あかしに荻の葉すぐる
細 源の御とぶらひもなくてゆく
まゝと云も時うつりといへ
ともその心をふかく思へる
弄 此歌しみじみとあはれなり

きひまじれるませも。みなちりみだれたる
を。とかくひき出たづぬるなるべし。もの
のあはれにおぼえけるまゝに。さうのことを
かきまさぐりつゝ。はしちかうゐ給へるに。御
さきおふこゑのしければ。うちとけなえ
ばめるすがたに。こうちきひきおとして。
けぢめ見せたる。いといたし。はしの方
についゐ給ひて。風のさはぎばかりをとぶら
ひ給ひて。つれなく立かへり給ふ。心
やましげなり
おほかたにをぎのはすぐる風のおとも
うき身ひとつにしむ心ちしてとひとり

くろく御ものゝさまを見
見して大方のさとりけり
てよそのおもても下の
ものまゝし 箋 荻の葉
よ折吹風のと聞えぬ
にも源の心なしもやと
かひあらぬるを見れ
しうへ 孟 荻の風もわが
身ひとつの身にしむ
らくしくうちみゆるを
細 日家の井すれども
弄 明石の心へもうら
まうしてほかに見ゆ
しるべのうらいひまう
せのすく。さてさ此哥遊
ひそとのうつくしさ 抄 箋曰
おもくへ下に白ふくおかれ
まことに御とさうしかな
ずとへられぬとおもひ
見へし 師曰

ごちけり。西のたいにはおそろしと思ひあ
かし給ひけるなごりに。ねすぐして。今ぞ
かゞみなども見給ひける。ことことしく
さきなおひそとの給へば。ことにおともせで
入給ふ。屏風などもみなたゝみよせ。物しどけな
くしなしたるに。日の花やかにさし出たる
ほど。けざけざとものきよげなるさま
してゐ給へり。ちかくゐ給ひて。例の風にことつけ
てもおなじすぢにむつかしう聞え
たはぶれ給へば。たへずうたてと思ひて。かう
心うければこそ。こよひの風にもあく
がれなまほしくはべりつれとむつかり給へば

風まして夕そてわくかれをうんや
細 源の御風よもおくれ
あらへさこまいのまうよ
うぐしうみづさこし
さうへもとすうくこ
細心のよそうるすなうべき
よく盃西の風まこをられ
んとの事ふ程よきうも
ふられこうゆでまそていかう
ど井らう更りうまふあわる
べしとぞ
やうくうう浜へ心むあこそ
箋いつうしうう源とどいえひ
なつてふふ多へとおぐれ
まふ浜心の方まよあうよ
ましへ師風よさうべき
よみ給をうれへまと
まうすし給へ
なつうさとうつふめる
河兼名苑云酸漿一名
洛神珠 和名保々都岐
なつうさし 孟童の吹て遊
物を也てふらとしら遊嘩
ふうつうけうそ 細 かこうろう

きくらまてひまて。源くもよつまそてわくかれ
随りんやりつくしかゝんさりとゝ御らん
つさおうちしゃうしくうくうゆてころうち御
こそ光ひよられ。しそりやとのまへ八ぐよ
うらかりふまてよ。ささしてりうられとなく
して。う川しことうらぞこまてる。つしかう
しきいうあひつうさまり。うつづさとう
いうめうやまよ。あうしうふく。うえのう。れ
のまづ。う川くしう光む。まくのいとあきう
まくくうるうそ。いうしきまれさくこし
さうちうの仰うはつ御うんつくべくきわ
らぐ。中将。いとう御やうまさくし給と。

こ盃ふこやうりてまへうくいへす
えくらぬとこし 和字之
りとこまやうよこうてすふと
よ源い夕顔とこ御くとあ給
白う。孟抄 夕の源の浜供よまう
なうそとふうう夕顔のんとえ
こうべさうや
まくさうつて花とり
孟屋風るてらのすく
おほいの靈胡うれ只
つくもおくつよ物のえど
も声どうろるうりしく
りのちうくれがへさわごこ
おさるうさ別 されう
め浜むまあとてもるれ
どるう人ととあやし
くめとまうしこ

てこの源りくうらそてしくれとゆりひまくろ
らうふく。すこしの手てこの真てへそ
ひるうしく。きとけるさとや。とらしひさわ
げくころよ。まさろしかどのしそりやらとき
まはいてよくこゑ。かくさそふれ。源てりしさ
のさうとわいけおや。しのまづや。ゆやとゆのくか
うしくゝふとしつえるれば。めのちうくる
處さはどくらとめとゆらぬ。さうやつけさ
御らんとゆそうしきれど。おやきつさよん

こゝろあてにしるき
細 平生ノ訓ノ義也之
師 ひきとゝめられく
しきかしし

まよふみきれ 細 幼か
の折よりうきられてそ
まかへるれもしとひ
あふく師夕の玉鬘 実
よみそるさもさいたつめ之
こそありや 河 兼諸の忠之
讖 日本紀 宜 師古云 理當然
也 漢書 おりしこえれたのへ
なハりりそひえひまつるか

めりくらつくよ兼据して 直
則く手こそ兼据きこしるる
ゆまうくうくしひとも 箋
まわりよハ他服なくにえかまはう
兄弟智合と評もくへき
父子兄弟と云ばうり通法人
つるくしく此相語師説さう
師 代法定 付テ心可見之

〈夕〉まし山吹の 花 玉鬘君の
をぐしと夕顔の君なぞ
らへまうく玉ぐりノ巻に
衣とくどら総よやまぶ
きのいろそろかハ此法弟
へまいらせら〔れ〕しく源
氏の詞ふ山吹かおつ
づくの君よ似うしひとる
とちひまつる〔略〕暑き
おもおりのしそへ〔奏〕れと

とゆうろきて枕ころれハ、たちうつくれにもと
うしろはこまりつるとひきしせうへるに
れびしのころよりてぐらくとこらかれけり
くしきるのしつ平すぎまいとすぐるやうる
よ海してぐらりけたへるハとくるれく
しきるこそあめれハぐあれうくいろう
まりわくえかひょぬく海るく地もけ
あれうなうそのりともるれ地のそ総
ともぬえ、うれ地りひもそひしつまくるゆめ
見むへなりやうや。あかうとおしともふ
んさるうし。母の伏う海、ゆうよとうしうく

とふえたずうらのえそ、しくらくそ
しるどとよんハなどくたころわやまうう
とききみんとゆかゆ、此ふうしにけちひ
ゆは、けりとうれとこえよそうさもさ
海いうらもあくひぬへくこあやへ、山ぶき
のさのれそうれさうさうよ。露うれうタ
ぶんえ、より地すひのそつてもなりよわえ
ぬまそへまれど、枕うち地が行うやうよ。白

[illegible]

少しみれは清く付にあれぬとハすれど、うちまぎらはしく夕霧の心中
の事なり 孟 今ハ八月なれハ不相合とぞ

いかゞあらんまめだちて
細 むつましき気色源の
おもふ心へ何とかあらんとてまめだちて
しき給ふをもとがめて
ふりして夕霧の心ひ給ふまで
哢日 師 源ハさらぬ体なく
すまして出給ふを夕の
心そのくく
吹みだる風のけしきにをみなへし
孟 女郎花の心をとりける
玉ハ我身のうへにかけて
さんらし 何心と後り
とまるへしと思ふのわざ事
また有 箋 玉鬘の心
あはくハよのつねの風も
吹みだる風にて

そしかりくるゆかりの風な
れハうらみにくき花ハしほ
まねつきと也
下露に 細 下露にうつし
ぐハおしき風にハ不居
おりくるとも花にも思ひ
てさりがたくしからん
ことのかへし 孟 源の御
心のゆくへて花とちなり
てをいてもまさる風にも
まがはじとなり 河 なよ竹
なよ竹とこそいへ
細 ならひくにもうちてやれなき
哢日 箋 諺語にあり
孟 源詞なるに竹ハをるに
こゝろ柔はれハ二さとも
ておれはおもき風にも折れ
ぬくと云心
ひが耳にやありけん 箋 夕
霧心 花夕霧の玉の言葉
よくさくならぬならへ
きこゆ人ねし それくえ
つらひか耳とは
おもかはすかさるを夕

花は限りこそあれ、そゝけたるしべ（花ハ木まゝ蘂なとの事と付る）
ども（ことも有る物をとも）まじるかし、人の御かたちの
よきは、たとへんかたなき物なりけり。御前に人
もいでこず、いとこまやかにうちさゝ（源と玉とく）
めきかたらひきこえ給ふに、いかゞあらん、まめだちて（源のく）（光）
ぞたち給ふ。女君（玉）
（玉） 吹みだる風のけしきにをみなへし
（夕霧の方へ） しをれしぬべきこゝちこそすれ。くはしくも（源の玉に）
きこえぬを、うちずし給ふを、ほのきくに（夕霧）
にくきものゝをかしければ、猶見はてまほしけれど（夕霧を）
ちかゝりけりと見えたてまつらじとおもひて（源の玉に）
たちさりぬ。御かへし（源のく）
（源の下露とハ細君を） 下露になびかましかばをみなへし
あらき風にはしをれざらまし
なよ竹を見給へかし、など、ひがみゝにやあり
けん、きゝよくもあらずぞ。ひんがしの御かた（細 花ちるさとへ）
へ、これよりぞわたり給ふ。けさのあさ（源のく）（河 朝寒）
さむなるうちとけわざにや、ものたち（納なとと絹なとの）
などする、ねびごたち御前にあまた（花散のこと）
して、ほそびつめく物にわたひきかけて
まさぐるわか人もあり。いときよら
なるくちばのうすもの、いまやう色の（らくなそこさ）
ふたつなくうちたるなど、ひきちらし給へり（細 源氏の給ふ也）

春のおりふしく
ゑびこくら　河 年頭 段 逸　手毛より女房之或調 行
あそこの川　細 めりとけるどのさくひう秘蔵みも工程みもあり　孟 ききとどりけてむ　今を
あどくもろやうすり
此前の垂せんざいのえん
河 康保三八有前栽宴
細 前栽のゆわくくわしあ
つとめられども停止せられ
なりとよし　孟 此らふまちり
さうかぐくに奏もあらぬ
とし 師 花数の給どもを
任立らんくと源のにて禁
中前栽の余あの用るこ
よ夕霧の百料を捌し
かうふくしゆかりこての用之　細三之師
れ宜浜し毎りんねう　本出氏
河 孟 紗 花 傳之れおらんねう
花 花文綾ハ有二花文之綾
く 謝恵連詩云客従遠
方来遺我鶴文綾と云
同らく或説ニ顕文綾く
けんかしさなと云
とし 細 衣のさもく顕文紗
うごえかぐそし 師 [illegible]

のさかりを[illegible]花のつぼせんざいのえん
もとまりぬるこそむりしりいふさらくして
んみはるまりしこらきこしれんともくさかりじ
るべき秋なりけるものゝ絵て[illegible]
んぞ海くなりけりのいへとりのいつくしき
うちすればやすかりそこいふそのくくん
みこどとしくしとゆかしとめるそし
けりへねうそことのごろつきおしうち花
とうへんまつ源おんうへいとわし
まり いさ色 しうり中将[illegible]

孟 花紋
このぐら源といふしうら
いか夜のすまし 孟 花田よりそむる
くもあし ききまゐるに
秋前の殿のとうなる
雲井廣稚先が若ぎの
前への草の卜

細 月草のうつしき也 花 此比の花くし鴨頭草の幽も
てうそはかなめくうちひとのめくめやすかし（夕霧ハ似合りんとし）
めりあらぬやうのうしとなりのそこら
絵ぬむりしさうさく光ぐり絵れとも色
よあうこそ中ねいる海くやましくらく
まりしさ文るにけめうをた川く姫
ぞのれさよまこりのこうかうさあるさ
よるんおりします風よそうさせ絵く
けさはえ地さあうり給とさうつるとれ
めのとぞこそもう地さけりしげるうし
くぞとのねとつうまつくんとものへし出

こゝやのいとくるしう　抄　花三条の宮の風により
見へしやうにおそろしきに
侍しよしと後の事也
ひめ君のこと　孟　姫君の殿は雛の御あそひ
ことくらにて夕霧問
めのと　師　雛の殿の事也
画似合　細　雛は花の色
ようも夕の雛乃いそやづ
ことしまねとあり
とりしらく　ぬりかさや
師　けしき一の文ろく公き
あはれしう　き絵やわ
ならこの見て
流つれひのとりて
孟　此君のまことの枕
ども見あつく
いたこれならで
細　秋の枕とものありて
養食之孟也
とくの礼おく
心の方への
細　源氏のかたちなり

孟 大宮之
宮のいと心ぐるしうおぼいたりしかばなん。ひゐなの殿はいかゞおはすらんと問ひ給へば、人々わらひて、あふぎの風だにまいれば、いみじき事におぼいたるを、ほとほとしくこそ吹きみだり侍しか。この御殿あつかひに、わび侍るなどかたる。ことことしからぬ紙や侍る。御つぼねのすゞりと乞ひ給へば、みづしによりて、かみひとまき、御すゞりのふたにとりおろして奉れば、いで、これはかたはらいたしとのたまへど、北の殿のおぼえをおもふに、すこしなのめなる心ちして文かき給ふ。

しまつらふされど
の方をさへいさの
よろこびさるにいはん
の夕霧の心中
の姫君の御とおもり
うじけなくとおぼしてはら
て出かけて　孟　細　に
されとあやしく
て　細　夕霧の才あれはつき
ゝ儒業を学で其の学
のこうそ売くとし優
あり方のうけたまは
坂すり　孟曰
風さわぎ村雲まよふ
細　雲井雁への哥なるべし
しはあて
孟　此哥何の無詮也
つくしてうた
とまふんより
こうくの哥の
めを付てこる
もて於勝の
師　心いはるゝ
へくのかはらみの

むらさきのうすやうなりけり。すみ心ことにおしすり、ふでのさきうちみつゝ、こまやかにかきやすらひ給へる、いとよし。されどあやしくさだまりてにくき口つきにぞおはすや。

夕霧
風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするゝまなくわすられぬ君

吹みだれたるかるかやにつけ給へれば、人々、かたのゝ少将は紙の色にこそとゝのへ侍りけれときこゆ。さばかりの色もおもひわかざりけりや。いづこの野べのほとりの花

いろりこそ　細　さらく㴑くくの玄之。花のかみよ紙のかみとことくのへてころ之　何　交竜
かねる。帚木巻よ車回ル。彼かね高の姫君よりよ仍て。歎きの年みもいつる
気大くこ父と同じの末葉よ付かさてこれ行かるよ、此梅経の中みもあり㴑中
ねいよくくしきまあんるれいさいらの々めもわりさうろやと浮れさうちり
花紫のうもとやうめりく菊葉に付さりうくのいろよハうらひさしく㐧さうらく
さいらのいろもわりさうりうりや　細　界下してののふで　表　夕霧界下の御心　義　玉海
の後ちて語られ　細　いろくの□よきる海辺の花よ消くへきるすぞしたつられのて花たるめゆ

いうくの神へ乃
あらのんくみも　巽　女房
おさく夕霧よ阻とうか、
てきしし　師　夕霧の気へ
法るか放女のさつみ之よ
家よもへかとくへく　立二
こさく
むすのまうけ　孟　杏る勅
細　夕霧の家人るり
もてなせもかとそ　細　姫
君こなく塗りかめ之　姫
表二人陶りのめ又　表　明
太姫君の紫之の流るよ

かうのんくみも。ことぞくちよそて。心と（夕霧の旬之）
くだくともそるさん。いかしくぐしく
（細　是ハ別の方るかせし　表一通ハ五多節かりへるかせし）
ろうこうし。ますもろいすそ。ひまればまさ
（冬二而られハ童又陪身よ誉なくし）
まんれいおりさわらいがらさいひとるれさら
（杏る助くし）
れむいぞんなよよ。こらさうくかさそてそくら
まうぞわうきひとくあぐすえんゆうし
じりるてうを給ふそんぐおりそよめくさ。
（細　紫之のハ桜ある）
柱本陸ひさるへしるどんらうち花ハ

くろうの物語

よのうきうわよいそり
まうら　義　ふるまいよけ
よわするとさそづうてと
見い男のさけこふ足とい
つり
おとくしぞうりハ
孟　玄々　年まぐそみ
付ういそくりそてみえ
まひつる跡をとタ乃
そうく

（夕の御暁い）緒ども花にあいらくべき困をて。御名花
（夕の君ハ窓陪　叙之）
ゆうしくぬこうちよおれぢらよつまど（夕の之）
のこすとひきさて。ありのわころびより
（姫君の姫君の）
それハいりのしそばもりうでらひきすうち
（ゆきうちさく）
給終ぞ。心ともうらえまう。人のまづけくま
ぐんべおよのあやめもみてぬ給よのてとん
（表　紫のこころこころえ之　師　姫君の御旬之）
りとするうもて久のれぞよ。うとのゆふるみ
（ゆくやるるの組之）
けふはらづれしうこ点の。ひこかうげ
うるやくみそく。いとおそくちひさ紀やう
あいらくさげようろづるし。地とくし
だうりいさ海うるよも旧のことなむし
よ。又ことよるすく　地　ひきさらまへるあめり

られハ蕣の花よしや
花の小姫君と名づけれ
とんくうるゝ扇の墨
まかり
ともかりぬべき
細 此んくハ暮夕よへだ
てうすくらそまかるべ
きんくうるとて深のお
まりよつぎてくそさせ
まふらく盃の小姫君
もおろかるも深の床
よるうれつゞく夕顔の花方る
おと兎の寝ゝのぶべき
もとくりうるれど深の
ゑるそミせしそまゐ
らせまうぬるすと云
呈蕣よハ出でとあり

う。おそまらいをすゞへりしと哥の上
めぐつうさくのさうつゝ山がきこゝ
いかくられハ蕣の花よやりふくりうんかぶ
くき木よりさきうりて風よなびきさる
おめかひにくそおうしと哥りひまへ
らるるんどなんよまうきそおけく
まうえまうげやうとおりぬべき行るが
らへぞそくのけがやうるゝそつるゝ
まるどそふよ。まめぐとおくうまくから
そどゞ兎の竹りとよ来りまされば乃
どやうまれをとろひし給。ろうとさま
うんぬどハ。こうし。めもさうへくどりてしな

あまくろ衣より
兵の女深めうりくて
面よつけてハ哀るとか
めさるらく
細 雲井鷹と
源氏をと
久しくんぶう中を去
りてまつく
みづく和琴かりかける
師夕顔のりをあく
めゐ雲井のひまいと
まうく

しけらひさうぞくどめくさうら
おうりかはめろべくもおくとぞてら
よさ尾君ゝらのおとゝ深よやつれさ
あそぞ。ゐすらくうる哀よつけてさゝる
りこゆらく哀あり。内の御かどもまつり
まつるよ御かとるふゝるのど楽うての壇
やうよ帝抱がうりやうし給。姫君を久し
くこまりぬり。おさまししさてしゞ
あさこよゐすさ給。りよ此の額よ来く
こうん。ふづりし抱えらしけよさく。ほめし
くみとろへてるん給ひろ。女ごころしよ
くいらくりら何う出ぎさ抱るりかれ。

ち綫らしけるぞ
孟夕霄のうたと下のくにま
司宵の述懐しきりく
そのころぞおもひやられける
細川太臣の詞なにはの恋の
うすく師不詞ハおもとへ
しりくぬまえうそのう
よるくらんそつゝふ詞之
むまめとつ御名ついて
細おとゞの詞むきとめと
出てよしざうそのことハ悪
やみくし孟太宰の河内屋の
女房うハ詞ひかしもとへと
くさのともしさるハかしと
とのまへく
さらてあふよや
細 式部抵
ぐ中さるハどうくしても
あそりぬまくもいふらえ
えくらうや 唯 いうれ乃
きくゆまくくんはゆかう

恵角よつけそのかく
とわうよつけらくもうらのとうんつく
られ給ひらわゞるぬ綫うろとうけぞ云ひ 細太の居之
どきうら気にしそのさまん じくらく
師 密丹よ急斗ささうとく
てきらよも中のく給とかのつぞよ
といふそぐるうむすおきうけ給てを
てもぐくひ給ぬとられくまとしまそ
まくひ給さや 太宰詞之 いつくあれおやしむすめ
とふ名ハまくさうれ、らやうやあつさ
のさまん、ぶそれ 細川太臣の詞 孟 わが娘とえさつけてよく
なんぐくるいうぞいちんとうせんとかく
え給ふや

し逃式部が詞作中くしねうしとうけりとや